

Hの人生

早川博信

今まで何をしてきたのか、どんなことがあったのか、そのときどんなことを思ったのか、そんなことを時間の順ではなく、短いエッセイのタイトルをあいいうえお順に並べた形で書いてみたい。

目次

- 一．当たった
- 二．下宿
- 三．五右衛門風呂
- 四．東西冷戦構造崩壊の前後
- 五．登山靴
- 六．名田庄多聞の会
- 七．何かしなければ
- 八．福島原発事故と311の会
- 九．山
- 十．最後に

一．当たった(二〇〇七年)

当たった、やった、という話から。二つあります。二〇〇七年はまさに当たり年であった。

最初は、カナダで、生まれて初めて買った馬券が当たった話です。

カナダのトロントに長年の友人を訪ねて七月十二日から二十日まで彼の家にやっかいになった。中国系のマレーシア人のフウさん宅である。彼と知り合いになったいきさつは一九八二年までさかのぼる。この年、私は三八歳、マレーシアのペナンで開催された国際学会 *Radiation Physics* に参加した。生まれて初めての国際学会でなんとか口頭発表を終えることが出来た。フウさんはそれ以前 IAEA の短期プログラムで金沢に来ており、われわれの職場を見学に来た。その年の夏、ペナンに行くというところは俺の大学で開催される学会だとなり、それで空港まで迎えに来てくれることまで話は進んだ。それが最初の出会いであった。フウさんはその後ブルネイに移り最終的にトロントに落ち着いた。(そのことは拙

著『旅行靴はいつもリュックサック』に書いた)

二〇〇七年の夏、トロントに遊びに行った。彼の家にやっかいになっていたが、彼は仕事(大学の非常勤講師、物理を教えていた)が忙しく、郊外にあった彼の家から私はバスに乗ってダウンタウンに出ているいろいろ見て回ったりしていた。

七月十四日、この日は土曜日で雨だった。北米で最も美しいと言われるウッド・バイン競馬場を見に行こうと、フウさん夫婦と私の三人は車で出かけることになった。トロントの北西にある競馬場である。

ウッド・バイン競馬場に午後三時前につく。雨だがレースは開催されている。椅子に座り競技場内を見ているうちに急に馬券を買いたくなり、これから始まるレースは第五レースであること、座った椅子の番号が五番であること、この二つから、五番の馬を五ドル買うことに決める。もう買う時間がないほど直前になり、後ろの席にいた中年夫婦のダンナ様に馬券の販売所に連れて行ってもらってやっとな購入できた。なぜ五番を買ったか窓口のおじさんに説明すると、「これは間違いない五ドル

になるぞ」と言うので、すっかりそれが本当だと思っていた。

レースが始まり大型テレビでその様子が映し出されているのでそればかり見ていたら、後ろの夫婦が「馬は直ぐそこに来る、そこを見る」と言うので、客席下のレース場に目を移すと、五番の馬が猛烈な勢いで追ってきて、最後のゴール寸前で見事先頭を切って入った、信じられなかった。飛び上がって万歳する。教えてもらった夫婦と握手、近くの人がミスターファイヴなどというので、その人とも握手。五百ドルだ、五百ドルだと浮かれていたら、電光掲示板に二十九・五ドルと表示されていた。それでも六倍になった。後ろの奥さんは「十番を買って残念ながら外れた、今日はこれで二十ドル負けた」とそれほどしょげかえっている様子でもなかった。フウさんの奥さんも一緒に買ったが、馬は後ろの夫婦の言うとおりに買ったので(二ドル)、同じくはずれであった。

二人の写真を撮って握手して分かれる。
ビギナーズラックとはこのことであった。



二つ目の当たったは、大阪での世界陸上でのこと。中学校のころ、足はあまり速くなかったが跳躍は得意だったので、三段跳びや高跳びや幅跳びの選手だったのです。一学級三十人ほどの田舎の小さな学校ではちよつと出来るともう選手、しかし、記録も捨てたものではなかったのですよ。中学校全部で百人足らずで、小学校の校舎のうち三教室だけが中学生の教室で教員室も小中

いっしよの部屋だった。そんなことがあったのか、あれは本当に自分の人生の一部だったのか、と思うことがあります。

それで大阪での世界陸上の話。

大阪で世界陸上が開催されることを知り、これは絶対に見逃すべきでない、一番の良い席で棒高跳びを見ようと決心。ネットで予約することにしました。なんと、その額たるや、定年退職後の慎ましい生活を送っている身には清水の舞台から飛び降りるほどの額でした。それでも決心は変わらず、妻と二人分を予約した。それがよかった。

二〇〇七年の九月一日、午後五時に長居陸上競技場に着く。開場は五時半で競技開始は午後七時から。じつはこのあたり日記を見ながら書いているのだけれど、記憶の中では競技は昼間から行われていて、明るい晴天のもので見ていたとなつているが、そうではなかった。

がんばって買った席はトラックを挟んですぐそこに棒高跳びのあの高いバーが見える好位置の席でとても嬉しかった。近くの席の年配の人と話していたら、自分

は卓球が好きで来年の北京オリンピックの卓球のチケットはすでに購入した、この世界陸上では一等席で毎日見られる券を買ったとおっしゃる、まあそんな人もい
るのだろう。

九月二日に女子マラソンがあり閉会式となる、本日は男子四〇〇メートルリレーの決勝、それに日本男子チームが出るというので、この日の長居競技場の入りはほぼ満員であった。三万六千人入ったとあとで聞いた。そんな満員の状態だったので。

競技の始まった後だったのかその前だったのか覚えていないが、胸にIDカードをぶら下げた競技場の係の方がわれわれの席の近くにやってきた。「J1の三列、七番の方は？」

妻が「私です」と手をあげた。

「当選されましたよ。あなたは今夜十種競技の金メダリストといっしょに写真が撮れることになりました。この後、電光掲示板に当選番号の発表があります」。

「十種競技の金メダリストと表彰後競技場内で写真を撮ります。十時頃迎えに来ますので、必ずここにいて

下さい」

最初なんのこともかすぐにはピンと来なかったが、じわつと喜びが湧いて来る。

わたしは「二人で来たので写真撮影は二人いっしょで良いですか」と訊ねる。「いいです」と簡単に認められた。競技は進んで、そのために来た棒高跳びもすでに金メダルが決まった。いまではもう誰だかどんな風にバーを飛び越えていったのかしつかり思い出せないが、バーの高さが上の観客席から見えていたせいか、それほど高度感がなかったことだけはつきり頭に残っている。

十時前に大きな電光掲示板に当選者番号が発表され、前の席の人が、「この辺でないか？」と後ろを向いたので、私は立ち上がって手を挙げてぐるりと一回転した。妻にもそうするよう促したが、恥ずかしいと言っ
てしなかった。私が当選したのでないのだけれど、大感激だったのです。三万六千分の一なんて、そう滅多にあるものではない。二〇〇七年二回目の大当たりである。

約束通り十時頃係の人がやってきた。「VIPしか入れないと
ころに行きますからこれを下げて下さい」とパス

をもらった。それを首から掛けて二人で係の人の後を付いていく。

どこをどう行ったのか、複雑きわまるルートを置いて行かれないように付いて行って、「ここで待っていて下さい」と言われたところは、トラックのレベルよりメートルほど下がったところで、百メートルの直線コースのほぼ真ん中あたりであった。目線の高さが選手のおくらはぎに相当する所だった。そんな高さのところから男女の四〇〇メートルリレーの決勝を見た。超一流の選手たちは私の目の前をあっという間に駆け抜けていった。

ところで、十種競技の勝者は「King of Athlete」と呼ばれ、陸上競技の中でもっとも偉大な選手としてあつかわれている。十種競技の金メダリストはチェコのロマン・セブルレさんであった。写真撮影はグラランド内のグリーンンの部分であった。

ロマン・セブルレさんを真ん中に妻と私と金メダリストの三人がにこやかに映っている写真は我が家の貴重な宝の一つである。

二. 下宿（一九六〇年～一九六九年）

幼いころ、まだ小学校に上がる前、つぎつぎと弟妹が死んで、自分だけはどういうわけか健康であった。田舎のことなので、「おまえは皆の分まで云々．．．」とか、「おまえの命の中には弟妹たちの命も云々．．．」とか、そんな難しい方ではなかったかも知れないが周りの人たちがわたしに伝えたがっていたのはそういうことであつた。ともかく非常に鬱陶しかった。負担になるので、そういうふうな言われ方をすると。

高校に入り、当時国鉄のバスが名田庄から小浜まで走っていて高校生はそれで通学していたが、わたしは疲れるとか勉強する時間がないとか言つて、高校一年の二期から小浜で下宿することになった。最初は叔父の家の二階であつた。近くを小浜線が走っていた。夜机に座り蒸気機関車の汽笛を聞いていると、ああ今あれを操作して機関士がいるのだと、夜の闇を疾走する列車に思いを馳せ、非常に開放感を味わつたのを覚えている。もう自分だけの世界だと、うるさいのは周りにいないのだと。

その下宿はいろいろあつて二学期だけで止め、三学期から入った下宿は今度も遠い親戚にあたる家だった。そこは神道系の宗教の家で（たしか、黒住教の、寺というか神社のようなところ）朝早くから大きな低い唸り声のようなお祈りがあつた。それが夕方もあつたような気がする。耳障りだったので「もう少し小さい声で」と頼みに言った。今から思えばそんなことは可能だとは思えないが、ともかく頼みに言った。「声が気になるようではダメだ、集中すればそんなことは気にならない」と言われ、ここも三学期だけで止めた。

当時わたしが在学していた若狭高校はホーム制という縦割りの組織で勉強以外の学校生活が回っていた。普通科、商業科、家庭科と三科あつて、それぞれ一年生から三年生までごちゃごちゃに混ぜた単位がホームであつた。三五ホームまであり、一つのホームは三十人かそれ以上いたような気がする。授業以外はこのホーム単位で動いていた。例えば体育祭、文化祭、音楽祭など。昼食時の部屋はホーム毎にあり、授業が終わって昼飯を食べに各自自分のホームに向かうので、廊下はごった返

していた。ホーム担任（アドバイザーと言つた）がいて、勉強以外の面倒を見ていた。アドバイザーはわたしが下宿を探しているのを知つて、自分がいるところに来ないかと誘つてくれた。福井から来ておられた社会科の先生で自身も下宿していたのである。

二年からの二年間、その先生と同じ下宿にいた。そこは大きな町屋の奥にある土蔵を下宿用に改造したもので、分厚い土壁の扉の向こうに廊下を挟んで四つの部屋があつた。ここは天国であつた。四つの部屋の住民はわたしとホーム担任の前田先生、それに小学校の女性教員、一般の会社員であつた。会社員のかたは日曜日毎にせつと革靴を磨いていた。下宿なので朝夕の食事の他弁当も作ってもらつた。

わたしの部屋は同じクラスのたまり場であつた。そう、たくさん同級生が来たのでない。気の合つたものがせいぜい三、四人、こんな映画を見たとか、XXが好きになつたとか、そんなことを話すのに集まつていた。勉強だけしておればいいので、こんなすてきな生活はなかった。中学校までずっと鬱陶しかつた気分も高校になり消

えた。

大学は金沢大学で、石川門をくぐって学内に入った。生協の本屋が並木の向こうにあった。初めて見たとき、非常に現実的な（リアルな）既視感があった。ここは来たことがあると確信できるくらいの既視感であった。

最初の下宿は医学部の近くで、母屋に三部屋、離れに三部屋あった。離れは二階建てで下は子どもさんが数人いる家族が住んでいた。二階にわたしの他、医学部の学生、しかしその頃は本当におっさんと思うくらい年配に見えた人たちが二名住んでいた。四国から来ていた人の部屋からは森繁久彌と加藤道子の日曜名作座がいつも聞こえていた。もう一人は大阪の人であった。三人はどいうわけか気が合って、ときどき、食事がまずいとか、ほか何か忘れたが家主の悪口を言っていた。それが聞こえたのかどうか、離れの人だけ引越して欲しいと言いだされ、やむなく出るようになった。

次に入ったのは、浅野川の近くの門がでんとある大きな屋敷だった。その二階に四部屋あり、NHKに勤めていた人が一人、あとは学生であった。庭が広く、そこ

にはせんべいを焼く工場があった。家内工業レベルの工場だが帰ってくるといつもせんべいの香ばしい良い匂いがしていた。ここに三年いた。大学までは歩いて十分足らずのところであった。隣の部屋は岐阜県の神岡から来た一年先輩の法文学部の人でふすまのドアを叩いては「話に入って良いですか」と言っしょっちゅうその人の部屋に行っていた。北アルプスに初めて連れて行ってもらったのもこの人であった。山に親しむようになったのもこの人のおかげである。当時の学生で『資本論』をすべて読んだのはこの人が最初であると言われていた。卒業後、東京銀行（当時唯一の外国為替専門銀行）に就職されたが自殺されたと聞いた。金沢は浅野川と犀川の二本の大きな川が流れ、緑も豊かなところだった。山も見えた。名古屋に移ったとき、それら川や山がなかった。本当に金沢が恋しかった。半年くらいは魂がまだ北陸上空を漂っていた。

名古屋での下宿は覚王山の「日泰寺」のすぐそばだった。ベニヤで仕切った程度の壁がある、四部屋が田の字状になっている下宿だった。この下宿は食事はなかつ

た。自分以外そこにいるのが誰だったのか知らず、まったく交渉もなくただ一人静かに住んでいる状態だった。金銭的に厳しい生活だったので、じつとお昼頃まで部屋にいと、ときどき「早川さん、お昼食べます？」と家主さんから声をかけてもらえることがあり、それを期待して待っていることがあった。下宿では食事がなかったので三食は専ら理科系食堂に行った。空腹を抱えて行くのに学食に近づくにつれて油のいやな匂いがして空腹感が消えていくのが分かった。いやだった。おいしいものが食べたいときは助手の佐藤さんに「どこかで何かおいしいもの食べさせてもらえないか」と頼んだ。佐藤さんは「コーチンでも食べに行くか」と連れて行ってくれた。情けない下宿生活だった。

三、五右衛門風呂（生まれてから〜一九九五年まで）

長いこと我が家のお風呂であった五右衛門風呂のことを書きたくて、いつ頃まで使っていたのか、改めて調

べてびっくりした。ずっと昔のことだと思っていたのが、改築してトイレや風呂が新しくなったのが平成七年だったのである。この年わたしは五十一歳で、百歳まで生きるとしてその半分が五右衛門風呂に入っていたことになる。これは正確に言うの間違っているのです。高校の時から下宿生活を始め、その後就職して家に帰ったのは三十も半ばを過ぎてからだったかです。大森さんは一家全員で遊びに来てみんな五右衛門風呂に入ってもらった。奥平さんも長谷美さんも我が家に遊びに来たときは、まだ五右衛門風呂であった。

五右衛門風呂と言っても釜だけがどこか外にどんとあってひたすら下から薪をくべるというようなのではない。いちおう、釜の周りはタイルで囲われていてちゃんとして部屋の中に収まっている、洗い場も着替えする空間も確保された立派な風呂釜なのである。薪をくべるところが室内の風呂釜のすぐ近くなのでわたしは外から声をかける「湯加減はどうだ」

釜全体が暖まり、下には燃えた薪の燗が残っているので、翌朝になってもお湯は温かい。誠にエコな風呂と言

える。

良いことづくめの五右衛門風呂だが、一番いやだったのが薪作りだった。川を渡ったところに木材市場があり、そこに長さをそろえるのに切られた一メートル弱の杉の丸太が転がっている。ただでもらえるので妻と一緒に拾いに行つてライトバンの後ろ座席を倒して持ち帰っていた。この作業は少しもいやではなかったが、持ち帰った杉の丸太を割つて薪にするのもそれほどいやでなかった。ただし、それが大量となると薪作りに追い回されることになる。

ナラやクヌギのような堅木は火持ちが良いのだが、杉はすぐに燃え尽きる。それでたつぷり準備しておかなければならない。ところが、割っただけではすぐに使える薪にならない。薪は乾くまで時間がかかるのである。だいたい前から割つて並べておかなければならない。この作業がとても忙しい。これをサボると、半生（はんなま）の杉を薪にしなければならず、そうになると薪が焚き釜の中でぶつぶつと泡のような水分を放出する。火力も弱い。その度に「もつと早くから作つていてくれていれば」と

どこからか文句がでる。

煙突掃除も大変だった。かなりの煤が煙突にたまる。屋根に上がつて上から大きなブラシ状の煤落とし棒を刺し込んで上下させる。下の煤ためにどつと落ちてくる。これをサボると、燃やしているときに火の粉が煙突から飛ぶのである。掃除しない煙突は大風の時には風呂を沸かすことが出来なかった。

そんなこんなで、風呂とトイレのある建物を建て替えるとき（言い遅れましたが、風呂もトイレも昔の格付けでは不浄だったので、すべて外にあった）、トイレは水洗に風呂はユニットバスになった。外にあるのは変わらず、雨や雪が降っているときはあいかわらず母屋から走つて風呂なりトイレに行かなければならない。

新築なった風呂に、母は「こんなお風呂におばあちゃんを入れてあげたかった」と言った。母は子どもをたくさん亡くし（一歳前後の子四人、つまりわたしの弟妹）、連れ合いを若くして亡くし、祖母とわたしの三人暮らしが長かった。わたしは、ああそんなことを思うのかと、ちよつと感慨深かった。

四、東西冷戦構造崩壊の前後（一九九八年、一九九四年）

一九八二年の最初の国際学会参加から、それ以降二、三年に一度はどこか海外で発表したいと決め、それを実行していた。県の職員だったので「県庁職員がなぜ海外で研究発表する必要があるのか」ということから、旅費等の出張旅費は皆無であった。ただし、「職専免」（ある期間、専ら職に就くことを免ず）にしてもらって年休を使わなくても休むことは出来た。今から思えば、十日や二週間、しかも堂々と休んでいたのはやはり非常識だった、まあ非常識でないと面白いことは出来ないのだけだ。

専門誌の後ろのほうに call for paper の欄があり、ここをいつも見ていた。学会の内容もさることながらどこで開催される学会なのか、そっちの方が大切だった。そこで、一九八九年十月二日から六日までユーゴスラビアのクロアチア共和国のドブローニツクで開催される国際放射線防護シンポジウムが目に入った。ここだと思っ

た。モスクワ経由のアエロフロートでベオグラードに飛んだ。アエロフロートは当時ソビエト連邦の国営（というのか）空港会社で、機内食にキャビアがいやほど出てたつぷりいただいたが、機体が蔭の部分に入ると極端に寒く反対に太陽光が差し込む側になると極端に暑かった。

ベオグラードで半日ほどの待ち合わせ時間があり、まず空港で現地通貨に換金した。三百ドル（四万五千円）を換金したら、十万ダイナールの新札を百枚束ねた一万ダイナールの包みが出でてきて、次に十万札が一枚二枚と加わって、あとはくちやくちの紙幣と合わせて、合計一〇三万八千五百ダイナールが私の所持品となった。とても財布に入らない。ドブローニツクのホテルに着いてから、三百ドル、四万五千円、一千万ダイナールと三つ並べて記念撮影をした。インフレというのは初めてこの目で見た思いだった。

時間があつたのでベオグラードの市内にバスで行った。公園の中では昼間からトランプカードのばくちが行

われていた。一枚のカードを客に見せ、「これですよ、よく覚えてください」と賭博氏が言う。言葉は理解できなかったがそうとしかないだろう。その一枚を前に並べた三枚のカードの下に入れる。客はあそこだと思う。そこから別の所にそのカードを移す。ああ、あそこだとわたしも思う。それが徐々に早くなり、最後に「どこですか」。あそこだと思うところに、ほとんど全部の人が賭ける。当然のことにそこにはない。それが何回も繰り返し替えられ同じ人がこれでもかこれでもかと負けていた。その度に分厚いディナール札が賭博氏のポケットを膨らませていた。

公園のトイレに入る。立つとその前に共同の流れがある、個々の便器のない、人が横に並んでするトイレである。その水の流れる溝に札が落ちていた。札に印刷された顔が小便する人のほうを見ていた。人々は無関心にその上に用を足して出ていく。

ベオグラードから学会の開かれるドブローニツクには国内線で飛んだ。大雨で出発時刻が大幅に遅れた。遅れることが放送されたので、空港から予約したホテルに

「チェックインは遅れるが必ず行く」と電話した。相手の声はなんだかずつと遠くの別の国から聞こえてくるような細かい声であった。

ずいぶん遅れて出発したのにどこか途中の空港に降りて、もうそこからいっこうに飛び立つ様子がない。外は前にも増して大雨である。しかも真つ暗。待合室にいる現地の人が話しかけてくる。

「JATの意味知っている？ JATとはユーゴスラビア航空のこと。」

「Just about timeだよ」

別の人が言う。「Just anytimeだよ」

どうなっているのか、アナウンスは全くないし、だいち、「適当に出る飛行機会社」なんて言われると、これはもう出発するのを期待できない。学会参加らしき人が二人いたのでその人たちに声をかけて、開催地のドブローニツクまで車で行くことになった。どうやって車を探したのか、車を持っている人から声がかかったからなのか、あるいはタクシー会社だったのか覚えていない。大雨の中、しかも夜中、バルカン半島のどこにいるのか分

からないところから、何度も何度も峠を越えて明るくなるころにドブローニックに着いた。車代は一人日本円で五千円だった。

日本を出る前、同じ専門分野の友人Nから、ユーゴスラビアに行くのならスロベニア共和国のリュブリャナにヨゼフ・ステファン研究所というのがあり、そこに知り合いがいる、彼に連絡しておくから便宜を払ってもらいたい、講演でもすればホテル代を出してもらえないか、と嬉しいことを聞いていた。学会の参加手続きを終え開場を下見していると「ハヤカワさんですか」と声をかけてくる人がいた。「ヨゼフ・ステファン研究所のXXです、同僚から聞いています。ここが終わったらわれわれの所に来て下さい」。かれはNの友人ではなかったがその後スロベニアに行くまでいろいろ世話になった。

その当時のユーゴスラビアは換金レートから分かるように超の付くインフレだった。いろんな値段は千の単位を取って言われていた。13,000なら13というふうに。現地の研究者は給料をもらったらずにマルクに換金

して、徐々に四、五日単位で現地通貨に交換するのだと言っていた。市内バスの料金が、そのときの日記を見ると、十一万デナール(四十円)で、千デナール札を十一枚料金箱にねじ込んだとある。ドイツが第一次大戦後超インフレに見舞われ、リュックにいっぱい札を詰めてコーヒーを飲みに行き、出るときにはもうひとつのリュックが要ったとどこかで読んだことがある。それほどではないがインフレのすさまじさは実感できた。

参加した学会のことにすこしふれたい(詳細は以下に書きました。保健物理、25、78-81 (1990))。

「国際放射線防護シンポジウム (International Radiation Protection Symposium(IRPS))」は、ユーゴスラビアのボリス・キドリツク研究所の放射線防護部門の三十周年を記念して開催されたもので、参加者はユーゴスラビアの七十五名をトップに、西ドイツ十名、アメリカ七名など、合計一三八名であった。発表件数は、招待講演九件、口頭発表四八件、ポスター発表五四件であ

った。

私は「Advanced Telemetric Monitoring System for Nuclear Power Plants in Fukui Prefecture in Japan」

のタイトルで発表した。演壇に置いてあったテーブルの内側には発表者に見えるような大きな字で、「Speak Slowly」と書かれていた。発表がシステム全体を紹介するものであったので、内容が総花的になり与えた印象が薄かったようだった。技術的な質問が数件あった。

一九八六年五月のチェルノブイリ原発事故の三年後の学会であったので、チェルノブイリ関連の発表がどうしても多かった。

ハンガリーの人から、一九八六年五月から一九八八年五月までブタペストとその周辺で、六五〇人を対象に人体中の放射性セシウム ($Cs-137$) 濃度を測定した結果が発表されていた。八七年五月から七月にかけて濃度のピークが見られた。その濃度は性別によっても差があった。これによる被ばくについても評価されていた。

お昼休みが始まる前、議長が「午後一時から四時半までお休みです。ワインを飲むなり、海で泳ぐなりしてお

休みください」という。ああここはヨーロッパだ、と思った。私はワインを飲んで少し昼寝して午後の部に臨んだ。

手元には予め入手した発表論文集があったし、スライドやそれらを参考に、それぞれの発表を理解して楽しむことができた。

学会が終わった後、ドブローニクからこんどはスロベニアのリュブリャナに飛んだ。

わたしをこれからスロベニアまでエスコートしてくれるヨゼフ・ステファン研究所の人が空港のクロアチアの人ともめていた。なんだかみんなどこかぎすぎすしていた。

リュブリャナではウラン鉱山を見せてもらい、ヨゼフ・ステファン研究所ではなんとか講演をこなし、二泊したホテル代は研究所が払ってくれた。リュブリャナもドブローニクと同様とてもきれいな町だった。

このときの旅の大きな目的は二つあり、ひとつは学会発表することと、もうひとつは自分と同一ような研究を

しているハンガリー科学アカデミーの環境放射線関係の研究所を訪ねることだった。

リュブリャナからブダペストまでは約五百キロである。車なら五時間のところを鉄道で十時間かけて移動した。

十数両編成の列車がリュブリャナ駅に入ってきた。ブダペスト行きの直通車輛はそのうちの一両だけであると聞いていたので次から次ぎへと入ってくる車輛の行き先表示板を目で追いかけていなければならず、けっこうくたびれた。ヴェネチア発ウィーン行きというのもあった。

ユーゴスラビアの北部からハンガリーにかけてはなかなか平野が展開していて、衛星放送用のアンテナが家の屋根に設置されているのを多く見ることができた。電波に国境はない。少し金ははるにしてもほんのちよつとした装置で誰でもが世界で起こっていることを目にすることができる。このあと数年後に起こる東西冷戦構造の崩壊という世界の激震を彼らは家のテレビで見ていたのだろう。

ブダペストには夜中に着いた。現地通貨を持っていず、

交換することも出来ず、ともかくホテルまでタクシーを走らせ、ホテルの人に立て替えてもらった。

翌朝、予め手紙で連絡を取り合っていたハンガリー科学アカデミー物理中央研究所、保健物理部門のトリチュムの研究者である Dr. Kristof Kozac がホテルまで迎えにきてくれた。

ハンガリー科学アカデミーは七つの中央研究所を有し、その下に四十余の部門を持つ巨大な組織で、ハンガリーでは学位は大学でなくこのアカデミーが授与すると聞いた。ハンガリー科学アカデミー物理中央研究所の保健物理部門を Dr. I. Fehér の案内で見学することができた。保健物理部門では測定器やソフトウェアを開発しており、この研究室が開発した放射線測定器 (TLD) を用いて NASA の女性飛行士がスペースシャトルの中で放射線被曝測定を行っている写真が、彼女のサイン入りで部屋に張ってあった。

『ハンガリーの TLD スタッフへ、ありがとう！この装置は非常に素晴らしい サリー』

想定器がスペースシャトルの中に浮んでいた。

ブダペストでの最後の夜。それまでずっとお世話になっていた、ハンガリー科学アカデミー物理中央研究所、保健物理部門のトリチウムの研究者であるコザックが、おいしいものを食べに行こうと、彼のところに留学できていた東ドイツの青年二人を誘ってわれわれ四人は夜のブダペストの町に出た。

高級なレストランであった。奥にステージがありそこに小さなピアノ、バイオリンが二人、ベースが一人、四人はハンガリーの民族音楽を奏でていた。コザックが「日本の音楽を」と頼むと「こんにちは赤ちゃん」が始まった。なんだか物悲しかった。

東ドイツから来ていた青年が、「あそこにいる婦人とその付き添いのような人、あれはソビエトの要人です。女性が一番地位が高い。今夜の支払いはわたしに任せて下さい」と言って席を立てて向こうに行った。

なんだか話しているのが薄暗い店内だけに見える。かれら三人はときどきこちらを見てうなずいている

しばらくして帰ってきて、「オーケーです。出ましょう」と言う。

彼から説明を聞く。

「わたしのロシア語は完璧です。そのことを自分ばかり知っている。彼らにはこう言ったのです」

―われわれ四人はソビエトからハンガリーに勉強に来ている者だが、このレストランがこれほど高いとは知らずに入った。とても払えないのでどうか助けてもらえないだろうか―

「誰がボスカ見分け、それにうまく言うのがこつです」ということは、わたしもその晩はロシア人だったのか。とても愉快だった。

一九九八年十月十五日に帰国した。それから一ヶ月の経たない十一月十日、ベルリンの壁が崩壊した。十二月三日には東西冷戦の終結が宣言され、そしてドミノ倒しのようにして一九九一年十二月二五日にはソビエト連邦が崩壊した。

一九八九年の年末、コザックからクリスマスカードが届いた。そこには次のように書かれていた。

「今年のクリスマスほど悲劇的なクリスマスはあり

ませんでした。ルーマニアからの難民が雪崩をうったようにブダペストを通過していった。悲惨な姿でした」

一九九四年、ふたたびブダペストに行く機会があった。一九八九年に買った市内地図に書かれていた通りの名前がすべて変わっていた。ロシアふうの名からハンガリー語の名前に。共産主義が崩壊して三年しか経っていないのに、町で見る貧富の差は明らかだった。街角ではそう若くない婦人が、刺繍の入った民族工芸品ともいえない美しいハンカチを二、三枚、手に広げて立って売っていた。

五、登山靴(二〇一五年)

もう十年以上使った無雪期の登山靴が崩壊寸前まで来て、これでは山で事故にならないとも限らない、危ないと思ひ、山の道具専門店に行つた。まだ十年は山に行きたいので今から靴を新しくするのは一つの励

みにもなるだろう。雨具や炊事用具はネットで買つてもオーケーだが、靴はやはり実際履いてみないと安心できない。

店に入ると「それでは足圧をお計りします」という。初めてのことでよく分からなかったが、足の裏のどこの部分にどれくらいどの圧がかかっているのかを見て靴を選ぶといいというのである。「サービスですのでどうぞ」と言われ、家庭用の体重測定器のようなものに載せられた。「この線に人差し指を合わせて下さい」。人差し指が分からない。なぜ手の指を機器の線に合わせなければならぬのか。「足の指の人差し指です」女性の店員は丁寧に説明する。小生「足の指も人差し指と言うの？」とチャラを入れるが、女性店員は微笑んでいるだけである。

測定結果は実にすばらしいものであった。左右の足の足圧はほとんど均等で土踏まずが深くきれいにできている。表示された図には、左右の足の真ん中に直線があつてその線と両足を結んだ線が交差する形のところに×点が出ている。身体全体の加重がここにかかっているのだという。「常日頃とてもすばらしいバランスで歩いて

おられるのが出ていますね」と店員は褒めてくれる「リップサービスでないの」とへそ曲がりの小生は突っ込むが、彼女は真顔で「そんなことないです、データがそのように出ているのですよ、あまりないいい形です」。

靴は予め買うと思っていたメーカーの製品が履き心地も良かったのでそれにした。近ごろの山行ははなはだ快適である。



六. 名田庄多聞の会 (二〇〇五年)

二〇〇五年三月三十一日をもって三十六年間勤めた福井県庁を定年退職した。これからは地元で過ごす時間が圧倒的に多くなるので、なんとか住みやすいところで過ごしたいと思った。田舎はそれほどいやではないが、自分の意見なのかどうなのかさっぱり分からないことをたいていの人がいうのはなかなか慣れることができない。自由に発言して自由に話し合いが出来る、誰にも遠慮せずに意見を言うことができる、そんな場があればいいと思った。それが生活全般に広がれば良いが、それはそれほど簡単でないだろう。

当時、あちこちで哲学カフェなるものはやり始めていた。それがモデルであったが、都市部と違い、知らない者が適当に集まり自己紹介も特にするのでなく、そのときに取り上げたテーマで自由に議論する哲学カフェのスタイルは田舎では無理だとすぐ分かった。ともかくテーマを掲げ、村内にピラを配り、予め何が話されるのかを周知して始めるほかないと思った。そのときのテー

マが興味深いものであれば何人かは来てくれるだろう。そのアイデアを役場の人に話したら「面白いから始めたら」といわれた。財政的援助も可能だと。

自分としては、取り上げたかったのは、仏教のこと、医学も含めた自然科学のこと、ただしこれらは生活から離れたところにある、一般的な勉強ではなく、日々の暮らしで気になることと結びついたそのような取り上げ方をしたかった。会の名称も大事なことの一つであった。カタカナ語でないこと、その名から内容が容易に想像できること、そんなことを考えながら、仏教の本の索引を眺めていた。「多聞」があった。これだと思った。仏教に詳しい方なら「多聞」に宗教的な匂いをかぎつけるかも知れないが、普通の人はただ「多くを聴く」としか受け取らないだろう。名田庄多聞の会にしようと思った。

開催頻度は年に三、四回程度を考えていたが、幸い、最初の数回は自分の人脈で講師を呼ぶことが出来た。後ろに資料としてこれまでの講師とテーマを付けたが、第四回では江角さんにも来てもらった。

そのうち、自分一人ではテーマの選択に偏りが出てく

るし、アイデアも枯れてくることに気づき、名田庄多聞の会・世話人ということで五名ほどの人に声をかけて世話人になってもらい、相談してどのような話をするか決めるようになった。

現役のころ、研修会に参加して話を聞いたことが何度もあったし講師になって話したこともあった。そのようなときいつも思っていたのは、聴きっぱなし、言いっぱなしばかりだということだった。聞きたいことがあるのに時間です、で終わってしまいます。それだけはしたくなかった。講演時間よりもその後の質疑応答時間を多くとることにした。講師の講演料と宿泊費も含めた旅費を村から出してもらえるので(いまは、名田庄村でなくて合併しておおい町になった)、講演と質疑応答の内容は村の財産にするべきだと思った。そのために講演とその後の質疑応答をすべて録音してテープ起こしをすることにした。デジタル録音機は優秀できれいに入るし、テープ起こしの時繰り返し聞くのに大変便利である。テープ起こした原稿は図書館で公開しているし、これまで第二十回までの分を二冊の本として残している。

会を運営して行く上の最後のもうひとつの原則は、聴衆を集めるために動員をかけるようなことは決してしないことであつた。聞きたい人だけが来れば良い、そのために参加者が少なくても意に介さないこと、このことは徹底してきた。そうでないと講師の方に失礼である。これは正しいのだが、どれくらいの人に来てくれるかいつも気になっていた。講師の方に「少ないかも知れませんが、しかし、聞きたい人だけが来ます」と言い訳をしていたが、どの講師も一人としてそんなことは気にしなくても良いですと言われた。数が少ないときも、「今日はよい議論ができました」といって帰られる方が多かつた。

二〇一五年十一月の時点で名田庄多聞の会は三一回を数えることになつた。十年で三一回、年三回のペースを保っている。何でも質問して何でも話せるという初期の目標は、達成されつつある。この間もある人が「この会は何を言ってよいで質問しますか」と前置きして質問された方がいた。

地元の方は「名田庄多聞の会と聞くと、なにか難しいことをしているように感じていたのですが、来てみると

本当に楽しいですね」と言われる。これはたいいの人の感想である。なにか難しいことをしているようだと思われれるのは、宣伝不足のせいなのか、残念な気持ちがあるが、できたらこれからも年三回くらいのペースで続けていきたいと思つている。テープ起こしは少々くたびれてきたのですが、何度も繰り返して聞くのは、それはそれで楽しい作業です。

資料…これまでの名田庄多聞の会の概要

二〇〇五年

第一回 「お釈迦様のお智慧を拝借」

大谷大学 宮下晴輝（十二月十日）

二〇〇六年

第二回 「原発のある町の人たちから聞いたこと」

（二月十八日）

第三回 「アスベストと私たち」 福井大学 日下幸則

（六月十三日）

第四回 「中国太湖 湖畔の風景」

JICA 江角 比出郎 (十月十四日)

二〇〇七年

第五回「食品添加物について考えましょう―食品添加物の功罪―」 仁愛大学 加藤隆夫 (三月二十四日)

第六回「ご縁ありて 今」 曹源寺住職 奥嶋佛心 (六月十四日)

第七回「森と里と海をつなぐ土」

京都造形芸術大学 原田憲一 (十月三十一日)

二〇〇八年

第八回「山や川などの自然からうつる病気」

福井大学医学部 岩崎博道 (二月二十九日)

第九回「揺れる子どもの心、揺れる大人の心」

財団法人松原病院 理事長 松原六郎 (七月十九日)

第十回「放射線と人間」

大分看護科学大学 甲斐倫明 (十一月三十日)

二〇〇九年

第十一回「池田町の元気のひみつ」

池田町 米作農家 伊藤弘文 (三月十四日)

第十二回「ネットワーク上の匿名とプライバシーの間

題」京都女子大学 江口聡 (七月十一日)

第十三回「寄せ場釜ヶ崎が映しだすもの」

釜ヶ崎キリスト教協友会、日本キリスト教団牧師

小柳伸頭 (十一月二十一日)

二〇一〇年

第十四回「貧困と野宿を考える」

野宿者ネットワーク代表、「ホームレス問題の授業

づくり全国ネット」共同代表、生田武志

(三月二十七日)

第十五回「農村を元気に、若者と年寄りが楽しく暮す

ために」名古屋大学名誉教授 竹谷裕之

(六月二十六日)

第十六回「どうなる？どうする！日本の食と農」

福井県立大学 北川太一 (十二月四日)

二〇一一年

第十七回「インドの家庭料理に学ぶ」

ヨーガ講師 木下順子 (三月五日)

第十八回「世界を旅する」

ノンフィクション作家 中村安希 (五月二十一日)

第十九回「生老病死ー東日本大震災に思う」

大谷大学 宮下晴輝（十一月五日）

二〇一二年

第二十回「東日本大震災と赤十字活動について」

日本赤十字社福井県支部 総務課長 山本裕行

（二月十一日）

第二十一回「漢字の話題あれこれ」

立命館大学専任職員（白川静記念東洋文字文化研究

所文化事業担当）久保裕之（六月十六日）

第二十二回「日赤宮城県支部での赤十字奉仕団活動等、

「東日本大震災での活動報告と今後の課題」

日本赤十字社宮城県支部 組織振興課、奉仕係長

井上嘉秀（九月八日）

二〇一三年

第二十三回「世界から見た日本のエネルギー問題」

KPMG マネジメントコンサルティング株式会社

三宅成也（三月二日）

第二十四回「モンゴル大平原の世界へ」

福井県国際交流協会ボランティア登録会員

和田エンケザヤ（六月一日）

第二十五回「エネルギーから見た三十年後の社会を予想してみる」

想してみる」

KPMG マネジメントコンサルティング株式会社

三宅成也（十月十九日）

二〇一四年

第二十六回「笑育」子どもを自立へ導く関わり方

「特定非営利活動法人「パパジャングル」理事長

荒巻仁（二月八日）

第二十七回「南極観測越冬隊の一年」第五十四次南極

地域観測隊・越冬隊員：早川由紀子（五月十一日）

第二十八回「淡水魚は海へ行く」福井県内水面総合

センター所長：岩谷芳自（十月十八日）

二〇一五年

第二十九回「自然と暮らす“旧暦”」

一般社団法人南太平洋協会 理事長：松村賢治

（三月十五日）

第三十回「革仕事の原点は西部劇 アメリカからスベ

インへ」

革作家 保田芳文（六月二十日）
第三十一回 「山が暮らしの場であった人たち」
登山家 増永迪男（十一月十四日）



七・何かしなければ

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が発生した。テレビは信じられないような状況を映し続けた。普通の人たちが撮った動画がインターネットに流れていた。生きているうちにこのようなことが起こるのかと思った。その後の福島原子力発電所の事故は、さらに私を不安に陥れた。あまりの緊張で気が狂いそうになった。どこか違うところにいるような、このままだと、もうすこしすると、頭の一部分が壊れるかも知れないという気がしていた。これはあとから聞いたことだが、家人は私がやたら些細なことですぐ気が変わって不快を現すのに気がついてきたようだ。

気が狂いそうになった理由は明らかである。愚かなことに長い間仕事で原子力発電所周辺の放射線監視にたずさわっていて、その過程で原発事故は決して起こらないと信じていたのである。戦時中、日本の勝利を信じて疑わなかった軍国少年となんら変わらなかったのだ。何かしなければならぬと強く思った。

旧知のもっとも親しい友人の一人である下道國さんに、放射線のことでも不安を感じている人のために何かしたいと伝えた。下さんは日本保健物理学会（放射線防護に関する研究領域を扱う学会、物理、化学、生物、工学との広範囲の人たちからなっている）の重鎮で、同じような提案が他の学会員からもあったようで、インターネットで質問を受けてそれに答えようとなった。

ウェブサイトをどのようにして立ち上げたのか、それはどのように運営され、どのようにして終了したのか、これらについては私的な感想よりももう少し公的なものから引用した方が良くと考え、サイト終了後われわれの活動が書物（注1）となったので、その「まえがき」と「あとがき」の一部を引用することでこの項の原稿としたい。

（注1）『専門家が答える暮らしの放射線Q&A』（日本保健物理学会「暮らしの放射線Q&A活動委員会」編集、朝日出版社、二〇一三年七月一五日、初版第一刷発行）。

「まえがき」から引用。「まえがき」は下道國氏による。
「二〇一一年三月、東京電力福島第一原子力発電所事故が起こった直後から、私たち日本保健物理学会の理事などの主要メンバーは、政府からの支援要請や所属機関の支援業務の遂行で、とても学会活動に専念できそうにない状況にありました。

学会として、学会内・外からの要請に対応できる体制を整えておくべきであるとの意見が出てきて、会員の有志による「保健物理学会有志の会（保物チーム）」がつけられました。有志の会は、三月一八日に学会広報担当（当時）近江正理事から質問・回答サイトの立ち上げの相談を受け、これに協力することになりました。

また、有志の会メンバーの一部は文部科学省の電話相談に協力することになり、一般市民の不安、情報への渴望、正確な知識の不足などを知るに及んで、ますます質問・回答サイトの必要性を痛感することになりました。
二〇一一年三月二五日に、有志の会一六名が「専門家が答える暮らしの放射線Q&A」ウェブサイトを正式に立ち上げ、理事会の承認を得て、ボランティア活動を開

始し、開始後4ヶ月で約七五〇件の質問にお答えしたの
でした。同年七月二〇日以降は、理事会に直属する形で、
若手研究会が中心となってQ&A活動委員会としてこれ
を引き継ぎ、約四〇名で活動して来ました。八月には、
学会が創立五〇周年を機に一般社団法人化し、八月二四
日に「暮らしの放射線Q&A活動委員会」が正式に発足
しました。

このQ&Aの立ち上げ時から一貫した姿勢は、

一、国・自治体・電気事業者の公表情報を懐疑的に捉
えている一般の方々に対して、その時点での情報・状況
を整理して、「大丈夫」と言えるものは、そのように回答
すること、

二、専門家として、国・自治体・電気事業者とは違う
立場から、科学的根拠に立って回答し、それが一般公衆
の不安軽減に繋がるべきこと、

三、研究者集団として、回答したことに対しては責任
を持つこと、

以上の三点でした。

具体的には、①質問に全て回答する、②丁寧に回答す

る、③データや論拠の根拠を明らかにする、④学会の品
位を汚さない、などに留意しました。

また、健康影響ではリスク（放射性物質による発がん
リスクの上昇など）に関する質問が多いことから、リス
クについては、①ゼロリスクはない、②不確実性は避
けられない、③集団リスクに照準し個人リスクは考慮
していない、ことを基本に置きました。（後略）

なお、このときの「暮らしの放射線Q&A活動委員会」
の幹事団は下記の通りであった。（所属は二〇一三年六
月現在）

委員長・学会理事 伴信彦（東京医療保健大学）

副委員長・若手研究会幹事 河野恭彦（日本原子力研
究開発機構）

副委員長・若手研究会幹事 荻野晴之（電力中央研究

所）

相談役 下道國（元藤田保健衛生大学）

相談役 早川博信（元福井県職員）

学会広報担当理事 谷口和史（日本原子力発電株式

会社)

なお、前掲の書物にはウェブサイト回答作成者全員の氏名と所属が掲げられている。

このようにして始めた活動は、二〇一三年一月末に質問の受け付けを終了するまで一八七〇件の質問すべてに回答してきた。回答するときの苦労やそこから学んだことなど「あとがき」を引用することで記したい。「あとがき」は伴信彦氏による。

〔(前略)〕

専門家が答える暮らしの放射線 Q&A」の活動を通して、私たちはできるだけ正しい知識と情報をお伝えするように心がけて参りました。

しかし、簡単にお答えできる質問は一つもなく、複雑に絡み合った知識や情報をどのように切り常に難しいことでした。

専門家として腑に落とした事柄をどこまでお伝えできたのか、つまりサイトをご覧になった皆様にごどこまで納得していただけたかと考えると、いくつもの反省点が頭に浮かびます。

分かっていただきたいという思いばかりが空回りして論理性を欠く説明をしてしまったり、直接の専門ではない事柄について自分自身がまだ腑に落ちていないことを痛感させられたり。回答に携わった者たちは、それぞれに最善の努力をして参りましたが、日々、反省の連続だったと思います。

それでも、初期のボランティア・メンバーおよび若手研究者たちの尽力によって、Q&Aサイトを二年にわたって継続することができ、それが本書の発行につながりました。関係各位による多大な貢献をここに明記しておきたいと思います。

また、全体の調整にあたった幹事団の努力も大変なものがありました。とりわけ、全回答の最終チェックにあたった下道國先生、早川博信先生の労を厭わぬ姿勢にただ敬服するばかりです。サイトの立ち上げのときから今日に至るまで、お二人の誠実かつ冷静なリードなくして、このQ&A活動は成り立ちませんでした。

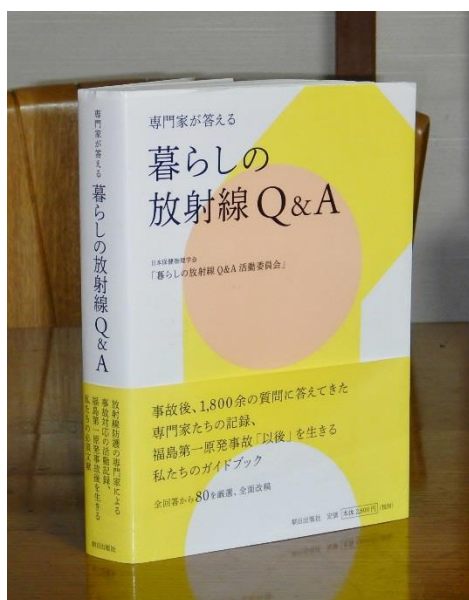
河野恭彦、荻野晴之の両君は若手の代表として幹事団に加わり、世代を超えた協力関係の実現に尽力してくれ

ました。河野君は回答状況の確認やサイト管理等の裏方仕事を一手に引き受けてくれ、荻野君は線量計算や技術事項の確認等に力を発揮してくれました。

学会担当理事である谷口和史氏からは、折にふれて大所高所からの助言を受けました。要所要所で一味違う視点が加味されたことによって、社会との接点としてのQ&A活動の役割を再認識することができたように思います。

本書の編集・発行に当たっては、山本貴光様ならびに朝日出版社の赤井茂樹さんに多大なご助力を賜りました。専門家特有の硬い文章を隅々までチェックしていただいただけでなく、数々の有益なコメントを頂戴し、私たちも大変勉強になりました。お二人の献身なしに本書が日の目を見ることはありませんでした。篤く御礼申し上げます。また、DTPのみならず、校正に関しても、中村大悟さんにお世話になりました。

最後になりましたが、質問をお寄せくださった方々、またサイトをご覧くださった方々に、心より御礼を申し上げます。(後略)



この活動は大変ハードで辛いものであったが、このサイトを見つけてやっとな荷がおりました、というような感想が寄せられるとやっていたよかったです。

もう二度と誰もこのようなことをしなくても良いことを願う。

八、福島原発事故と311の会（二〇一一年）

福島原発事故は本当にショックな出来事だった。自分の馬鹿さ加減も露呈した。情けなかった。この落とし前をつけなければいけないと思った。そんなとき、二〇一一年の夏が終わろうとしていたころ、地元の知人の一人が「早川さん、原発や放射線に関する勉強会をやつてくれませんか」と言ってきた。われわれの住んでいるところは関西電力大飯発電所からも高浜発電所からも二十キロの範囲にある。「この地若狭でもあのような原発事故は起こりうると思っているので」、ということだった。声をかけたら十人に満たない人たちが集まった。会の名称を「名田庄原子力基礎教室」の会」とした。通称は二の会。事故から九ヶ月経った二〇一一年の十二月に会は発足した。

会則の一部にこう書いた。

”第4条 本会は平成二十三年三月十一日の東日本大震災に伴って発生した原子力発電所事故の影響を理解

し、それらに関連する様々な科学的解説や説明について自ら判断できるよう勉強することを目的とする。”

”第5条 本会は前条の目的を達成する為に下記の事業を行なう。

- (1) 原子力や放射線に関する基礎的な勉強
- (2) 原子力や放射線の専門家による講演
- 3) 一般市民の原子力や放射線に関する理解を助けるための適切な事業
- (4) 目的を同じくする団体相互の連絡と協力の促進
- (5) その他本会の目的達成の為に必要なる事業”

勉強会の推移

最初の勉強会を二〇一一年十二月九日に開催した。最初の会合だったので、この会に入った人からなぜこの会に入ったかを聞いた。われわれの住んでいる旧名田庄村（現在はおい町名田庄）は、関西電力の大飯発電所からも高浜発電所からも二十キロ範囲に位置し、福島のような事故が起これば福島と同様の状況になる。みんなの

頭にはそれが確実にあった。会費は年間二四〇〇円とした。当面の勉強としては私が資料を準備して放射線・放射能に関する基礎的な勉強を継続していくことになった。会合は基本的に月一回開催することとした。

二〇一一年五月に私は友人の案内で妻と宮城県女川町の被災地を訪れた。福島原発事故当時モニタリングの中心としてやっていた宮城県女川原子力センターは津波に襲われ、一年後に見た原子力センターは完全な廃墟であった。そのときの写真をみんなに見てもらった。

月一回の勉強会は会員が全員そろうのはめったになかったが、教科書を使ったり、施設の見学をしたりで続けていた。基礎的な教科書として田崎晴明著『やっかいな放射線と向き合って暮らすための基礎知識』を購入した。みんなは線量と健康被害のおおよその関係が把握できたと言っている。福井県が各地に設置しているモニタリング結果を見る装置（副監視局と呼んでいる）が役場の玄関にもあるので私がその使い方も説明した。その後、関電のモニタリングセンターの見学など原子関係施設を見学した。二〇一五年七月時点で勉強会は三四

回を数えている。

以下では二〇一三年六月七日から九日まで福島県館村長泥地区を訪問したときのことを書きたい。参加者は七名であった。レンタカーを借りて名田庄を出た。北陸道を新潟経由で夜走り、福島には八時間で着いた。

なぜ、飯館村の長泥地区だったのか。会のみんなとどこに行くか相談していたとき、ともかく無人になったところを見なければと話が出た。友人で福島に入っている方がいたのでその人の伝手で、飯館村長泥地区の自治会長の嶋原良友さんを紹介してもらった。

飯館村長泥地区は、二〇一五年七月現在、依然として「帰還困難区域」になっている。「帰還困難区域」とは、「居住制限区域の一部地域で、放射性物質による汚染レベルが極めて高く、住民の帰還が長期間困難であると予想される区域。具体的には、五年間を経過してもなお、年間積算線量が二〇ミリシーベルトを下回らないおそれがあり、年間積算線量が五〇ミリシーベルト超の地域許可されたもののみ立ち入り可能」な区域をいう。この区域は昼間は許可を得て出入りができるが、夜間は滞在

することができない。我が家に行っても（帰っても、と言うべきか）、夜になると出なくてはならない。

鳴原さんの自宅を訊ね、われわれの車に同乗してもらう。役場で「帰還困難区域」に入るための許可書もらう。地区の自治会長でも許可書があるのを知った。車の中で「皆さん、どんな仕事をしているのですか」「炭焼きです、タクシーの運転手です、看護婦です、何も仕事なしの年金生活者です・・・」「ふうーん、目的はなんなの？」「ただ、見たいから来たのです」

「見るだけの目的で来る者はいないなあ」と鳴原さんに言われ、なんだか悪いことをしているのかと思っただが、どうやらそうでもないことが終日話を伺っているうちに分かった。誰かは何らかの目的を持ってくる、たとえば、測定するためとか、見たことを報告するためとか。それらは仕事である。やってくる人たちが自分たちのためにやっていることで、いわば現地は仕事のための対象となる。そのような人たちに対して、また来たのかと現地の人たちが思うのはよく理解できる。ただ見に来たのが歓迎されたようで、うれしかった。

飯舘村長泥地区は、われわれの住んでいる地域のどこにでもあるような集落で、山裾に民家が点在し、畑や田圃があり、つい最近建った新しい家や古い家があるが、そこには誰もいない無人の集落である。無人の村の交差点に通行止めの看板があり、そこには「災害対策基本法に基づいて通行止め」とあった。

鳴原さんが自分の家を見せるからとわれわれを案内してくださった。築六〇年の大きな家で脇には牛小屋があった。築六〇年の家は東電の評価額はゼロ（これは当時聞いた話なので、今はどうなっているのは不明）で、住めなくなったのに同じ家を建てることはできない。すぐ近くにモダンなすてきな家があった。「あれは築三年の若い夫婦の家だった」と説明を聞く。

家を見せてもらったあと、長泥地区の公民館へ。ここは、震災直後、南相馬市からの避難者一四〇〇人を受け入れていた。「ここでみんなおにぎりを握って出していたのだ」と。線量が高かったのに誰もそれを知らず、だれも教えてくれず、普通のように、避難してきた人に対応していた。

四月一五日、鳴原家のお孫さんを最初に、その後地区の子供達の避難が始まる。

四月一七日、枝野長官が飯舘村来村。四月二〇日、計画的避難区域に指定される。

鳴原さん自身は六月二二日まで長泥に滞在して以降避難生活に入られた。

長泥地区を出て、昼飯をいっしょに食べようと鳴原さんに言われ福島市内に戻った。そこで聞いた話しを以下にメモします。

鳴原さんの話

両方の出口が真っ暗のトンネルの中にいてどちらに行っても出口がなかった。このごろやっとなにかしなければと思うようになった。

われわれは犠牲者だ。しかし単なる犠牲者に終わるのではなくて、将来何十年後に、あの人達のおかげで分かったことがあったといわれるような、そんな犠牲者でありたいと思う。

それが光であり希望であり、そのように考えるとこれから生きていける。それぞれの避難先での生活が長引

けば、もうここには帰ってこないだろう。特に若い人は生活がある。高齢者も、買い物や病院受診など、町の便利さに慣れれば、こんな不便なところに戻って暮らすことは難しくなると思う。

そやけど、年寄りに家を残してやりたい。最後に帰る自分の家を。

今でも亡くなるとお墓があるここに骨を納めに来ている。長年住み慣れた家を残してやりたい。死んでからも帰ってこられる自分の家というものを残してやりたい。

九. 山（一九六三年）

あいうえお順で書き始めた「Hの人生」も最後の「や」まで来た。それが「山」であるのは何とも象徴的である。

大学入試が無事終わり、四月に入学するまで何もすることのない春の初めの時期だったと思う。住んでいる田舎のどこか低い山に、何をしに登ったのかさっぱり覚え

ていないが、山にともかく入って、ああこれは何と気持ちが良いのだと感じたことははっきり覚えている。

大学では同じ学科に山岳部の同級生がいて、山岳部に入らないかと誘われたこともあった。金沢大学はお城の中にあったので、石垣を岩の壁に見立てて山岳部の連中は岩登りの練習をしていた。母一人子一人だったので、山で死ぬわけにはいかないと思っていて、山岳部はその可能性があるので少なくとも学校にいる間は山岳部だけはダメだなと思っていた。そうかと言って安全性の高いワンゲルには入りたくはなかった。食事の前にみんなで歌を歌うのは自分のスタイルでなかった。「下宿」のところで書いたが、同じ下宿に岐阜県や長野県の人が入っている。その人たちに北アルプスの双六岳、鷲羽岳、常念岳などに連れて行ってもらった。山岳部の同級生は部長になって、彼に冬の医王山に連れて行ってもらったのが初めて。冬山だった。雪の上で寝るのが本当に嬉しかった。

就職してからは、独立して社会人になったのだから親からとやかく言われることはないの、一般の山岳会に入った。県庁にも県庁山岳会なるものがあつたが、仕事

が終わった後も職場の関係から自由でないような活動に面白いはずはないだろうと一般の山岳会を選んだ。福井山岳会は年齢も職業も山での活動も幅の広いスペクトルを持った山岳会で、この会に入ったことはなににも代えがたいものがあつたといまつくづく思う。この会に入っていなければ、どれほどつまらない人生だったろうかとしみじみ思う。

いちおう簡単などころだけだったが岩もやったし、冬の山にも行った。死ぬ寸前の時が一回あつた。いっしょに行つた若い人がもう少しで事故を起こすところだったこともあつた。

いま、まだ身体で具合の悪いところはこれといってない。体力は間違いなく落ちてはいるがそれ相応に楽しむことが出来る。同じようなレベルにある人が会には何人かいるのでその人たちと行くところがある。

一番不思議なのは、かつて山に行けなくなつたらどれほど悲しいだろうかと思つていたのに、だんだんそれほどでもなくなつてきていることである。玄関を出るために必要なエネルギーが以前にも増して必要になつてい

る。「まあいいか、家にでもいるか」ということがあるのである。この世から離れる準備みたいなことだなと思っ
ている。

十、最後に（年代に関係なくずつーと）

二十歳すぎに「ああ、自分は死ぬのだ」と本当に実感した。実感したというところが肝心で、子どもを見ても若い人を見ても老人を見ても等しく間もなく死ぬのだ
と思った。恐怖だった。本当は一番に書かなければなら
ないのはそのことなのだが、まだうまく書けない。仏教
やその他悶々としたことを少し書きたい。

大学に入って受けた教養の授業はほとんどすべてつ
まらなく、唯一面白かったのは橋本芳契先生の授業であ
った。「哲学」だったのか「宗教」だったのかよく覚えて
いないが、橋本先生は維摩経（ゆいまきょう）の泰斗だ
ったのを後で知ることになる。若いころに抱えて込んで
しまった、どうしようもない人生の大問題を橋本先生の

ところに行つて相談に乗ってもらっていた。先生のところ
に行くのは卒業後も続いていた。

橋本芳契先生は、昭和五十年三月金沢大学を定年退官
され、同年四月新設なつた福井県立短期大学に招かれ福
井に着任された。当時、私は福井県庁の職員として福井
に住んでいた。先生が福井に着任されたのは思いもかけ
ないことであつたが、これは格好のチャンスの到来でも
あつた。先生にお願いして「維摩経」を最初から最後まで
一字一句すべて教えて欲しいとお願いした。まだ自動
車を所有していないときで、五十CCのバイクに乗つて
週に一度先生の住んでおられた職員寮に通つた。一対一
の講義はすべてテープレコーダに録音した。そうして、
二年半近くかかつて維摩経を教えてもらった。これは本
当に楽しかった。

このときのテープを起こして平成六年十月に山希房
佛書林より『維摩経講話』を上梓した。著者橋本芳契、
編者早川博信となっている。

その後、橋本先生の紹介で大谷大学の宮下晴輝さん
（仏教学）と十年かかつて龍樹の『中論』を読んだ。月

に一度私が大谷大学まで出て行き、これも一字一句おろそかにせず読む方法をとっていたが、向こうの都合もあり毎月決まって一度勉強会をすることが出来ず、十年もかかってしまった。

その他、『大乘起信論』も小浜市のお寺の住職と、この方はかつてIBMの技術者であったが思うところあり出家された外国人だったが、何年かかかって読んだ。

「なぜ死ぬのか」を、仏教の中でいろいろ勉強したのにいまのところうまくそこから抜け出せない。それは「信」があるか否かに尽きるところと思うが、今のところないと言う他ない。

仏教の勉強にしろ、哲学の勉強にしろ、誰かと議論しながらするのが一番いい。仏教ではそれが出来たが、いま興味がある哲学ではそれができなのが残念である。哲学の本を、偏ってはいるが、一人で細々と読んでいる。しかし、肝心のことにはまだ明瞭に分からない。ほんの少しだけ、これかなというものはあるが、まだそれだけのことである。死ぬまで考えることがあるのは幸せと言うべきかとも思っている。